

阜月

〔さつき〕令和4年5月

「五月」「早月」など書いても「さつき」と読むが、この時期に田に苗を植えることから「早苗月」とも言われ、この呼称になった。

発行：北海道神社庁一區教化委員会

馬は速しとて、朝しばらく走りて止まんには、いかでか牛の終日歩かんに及ぶべき。今日やまず、明日やまず、今年やまず、明年やまず、而して後、そのしるしあり。

三浦梅園・梅園叢書

今月のことば

馬は速しとて、朝しばらく走りて止まんには、いかでか牛の終日歩かんに及ぶべき。今日やまず、明日やまず、今年やまず、明年やまず、而して後、そのしるしあり。

— 三浦梅園・梅園叢書 —

三浦梅園は江戸末期の儒医であり、条理学の創始者である。馬は走るのが速いといっても、朝しばらく走って止まっていたのでは、結局、牛の歩みにも劣る。毎日、今日も明日も、今年も、来年も、牛の如くネバリ強く、歩み続けていければ、その結果は馬鹿にならないものがある。毎日を努力し続ける以外にないというのが、人生の験しを見る前提である。正直の二字を一生守りつづける。それ以外に人生はないと考えるのも一方法である。馬鹿正直と言われるても、ずるかしい正直者よりも最後には、賞められ者になる。一生、正直の二字にはずれない人として尊敬された生活を送った江戸時代伊勢神宮の神職、出口延佳は、この人には戯言を話すと戯言の通りに実行するので、他人は戯言をつくのを止めたといわれている。正直な人生を送るものは、他人として自然に正直ならしめるといわれている。

(続神道百言 一般財団法人神道文化会編より抜粋)

季節のまつり

端午

五月五日

こどもの幸福を願って立てた鯉のぼり

五月五日は「端午の節供」といわれ、もともとは田植えを控えた時期に、心身を清め田の神様をまつる行事でした。魔除けのためにお供えする菖蒲（強い香りやどがった葉先が邪気を祓うと信じられていた）と、尚武とをかけて武者人形を飾るなど、次第に男の子の節供として広まり、「立身出世」を願って鯉のぼりを立てました。又、鯉のぼりは本来、お田植祭に神様を迎えるためのお清めが済んだ家の目印から発達したものともしられています。



田植

稲の苗(早苗)を苗代から本田へ、村総出で共同作業

春の最も大きな行事は田植えでした。一年の稲作の始まりである田植えの前にはお祭りが行われ、家族総出、村総出で田植えが行われました。機械化が進んで田植えの風景が様変わりした今でも、各地で行われる田植え祭には昔ながらの様子が生きて残っています。

端午の節供の行事食

行事食とは、季節折々の伝統行事やお祝いの際にいただく特別な料理のことを言います。

それぞれの旬の食材を取り入れ物が多く、季節の風物詩の一つにもなっています。本来、年中行事は「神様を呼び、お供えを捧げる日」で「ハレの日」と呼ばれ、普段の食卓にはないご馳走を並べて、日常の「ケの日」と区別してきました。

農耕民族である日本人は、季節の変わり目に行事を行うことで収穫に感謝し、「ハレの日」というご馳走を食へる日を設けることで、身体に栄養と休息を与えてきました。行事食が体調を崩しややすい季節の変わり目を、賢く乗り切る「食の知恵」でもあります。

端午の節供には、一年目の初節供（生まれて初めての節供）に「難を避ける」という意味のある「ちまき」を、二年目からは柏の木が新しい芽が出るまで古い葉を落とさない事から「跡継ぎが絶えない」「子孫繁栄」の縁起物とされる柏の葉を二つ折りにして包んだ「柏餅」が食べられます。

なお、この「節供」ですが、現在では「節句」の表記が用いられることが多いようです。しかしながら、神様にお供えを捧げるといふ古来よりの考え、本来の表記では「節供」であることを忘れてはいけません。

扇枕温被

夏には枕元で扇で仰いで涼しくし、冬には自分の体温で親の布団を温めてから、親を寝かせる、親孝行のたとえ



薔薇

令和 4 年
2022年

5 月

日	月	火	水	木	金	土
1 仏滅 とら	2 大安 八十八夜 一粒万倍日 う	3 赤口 ● 憲法記念日 たつ	4 先勝 ● みどりの日	5 友引 ● こどもの日 端午 立夏 うま	6 先負 ひつじ	7 仏滅 さる
8 大安 とり	9 赤口 いぬ	10 先勝 三りんぼう る	11 友引 ね	12 先負 うし	13 仏滅 とら	14 大安 一粒万倍日 う
15 赤口 一粒万倍日 たつ	16 先勝 み	17 友引 うま	18 先負 ひつじ	19 仏滅 さる	20 大安 とり	21 赤口 小満 いぬ
22 先勝 三りんぼう る	23 友引 ね	24 先負 うし	25 仏滅 とら	26 大安 一粒万倍日 う	27 赤口 一粒万倍日 たつ	28 先勝 み
29 友引 うま	30 大安 ひつじ	31 赤口 さる				

二十四節気

【立夏 りつか】…五日

旧暦四月巳の月の正節で、このころになると、山野に新緑が目立ちはじめ、風もさわやかに、いよいよ夏の気配が感じられてきます。

【小満 しょうまん】…二十一日

旧暦四月巳の月の中気で、このころは陽気盛んで、山野の植物は花を散らして実を結び、田に植える準備をはじめると、万物がほぼ満足する季節といえるでしょう。

六曜・選日

《六曜》

- 【先勝】…諸事急ぐことによし、午後よりわるし
- 【友引】…朝夕よし、正午わるし、葬式を忌む
- 【先負】…諸事静かなることによし、午後大吉
- 【仏滅】…万事凶、患えは長びくおそれあり
- 【大安】…何事をするのにも吉の日、大吉日
- 【赤口】…諸事油断すべからず、正午のみ吉

《選日の吉凶》

- 【三りんぼう】…三隣亡日、普請始め、棟上大凶日
- 【一粒万倍日】…出資・投資・購入、新規事業開始
婚姻は吉、借りる、離別は凶

七十二候《5月》

小満

初候・蚕起食桑（かいこおきてくわをはむ）
蚕が盛んに桑の葉を食べ始める
次候・紅花栄（べにばなさか）
べにバナが盛んに咲く
末候・麦秋至（はくしゅういたる）
麦が熟して畑は黄金色になる

立夏

初候・蛙始鳴（かわずはじめてなく）
カエルが鳴き始める
次候・蚯蚓出（みみずいづる）
ミミズが地上に這い出る
末候・竹笋生（たけのこしやうす）
竹の子が生え始める

※七十二候とは二十四節気の各節気をさらに3つの候に細分し、一年を七十二に分けたものをいいます。季節の移ろいを気象や動植物の成長・行動などに託して表現したものです。

安産祈願 5月の戌の日

9日（月） / 21日（土）

*戌の日以外でも安産祈願のご奉仕をしております。神社にお問い合わせください。

《3日 憲法記念日》

日本国憲法の施行を記念し、国の成長を期する日です。

《4日 みどりの日》

自然に親しむとともにその恩恵に感謝し、豊かな心をはぐむ日です。

《5日 こどもの日》

こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する日です。

● 祝祭日には国旗を掲げましょう

「夏も近づくと八十八夜」

は、いつ？

よく知られた茶摘み歌に「夏も近づくと八十八夜・・・」という歌があります。八十八夜とは、立春から数えて八十八日目にあたり、現在で言えば五月一日頃になります。

実際、歌にうたわれているように、この日に摘んだ茶の葉は上等とされています。八十八夜は、まさに「夏も近づくと」ということで、農村では田の苗代作りや、畑作物の種まきを始める重要な時期です。

とくに「八十八夜の別れ霜」といわれるように、霜による農作物の被害から解放されるべきであり、「八十八」は漢字の「米」に通じ、未広がり「八」が重なる縁起のよさも加わって、昔から農事の目安として欠かせない日でした。この日は、田の神に供え物をして豊作祈願をしました。